



45
4419
へ 時 1-4
4419
1

友玉抄 史系之

昭和九年
九月二日
購本

長共文集元亨秋書ふときこころ

集編ありるをれとの号とやうて

名とあむせしなりこれハ延宝ふはまり

之寶水小終るその間共えとあつとあ

きむう故ありしとあるふ普子の滅後

ふいづつてきれ人乃家ふ何りともあれ

むしてきしも正徳より今延喜子まで

ふこねも又共えと強りき何までとその名

乃久しむきとんくけ集れ世ふかれ

かろゆふこよ國ゆきとくき



かゝるまゝかほん神ふつふ大徳のまかり
た代の物このまゝ多く何つめもが
中にけ書もごう法阿まらるるまゝ
をたやまとめてまの〜ぬまにぬら
小娘うひめ心の泊連もゆいけつ
法垣とすの宮奴の杖の巻又福ある
をもいふ〜らぬやかもりれんた
まをのつ〜あまの志まらひのま
もの〜縁を求めて人々もま
めるふ大徳にけらるるまゝもまの

くるの〜ま〜あま〜ま〜
も席をか〜て〜
〜
人〜
ら〜
先師のぬをぬ〜
あ〜
この法は〜
す〜
福〜

よはのさびたねを彼家ぶゆきこころ
るの度をこころのわがあけさうら
らうして衣通船の海ふ七日すて
らちさうあかり者のこもたこうら
さよもあてさうらんかちしてあ
しつらよりこころひもてかたか居る
よみの紙と申よまありかたそのふ
草稿のやうよあくる本のまじ墨八
十八を一冊とせるものよて普子れ
も澤今あをこころこころらねも

きこころこもあねよあつこころまね
ら一のあかんさよほしてかたりこころちも
うもとあひもあまを成く今ハん
しあよりのあねこころと櫃よかよあ
くかこころこころあつ衆成といふ業
をうつて氷れ下ある魚を画くこころ
とく一畫をまこころうつて梓紙
し世の普子をあつる人こころうら
こころおあつこころ侍りぬ

百萬坊音原

五元集

延室

貞亨

室永

天和

元禄

室晋齋ハ米元章の硯の裏に
鑄入をり号し三季子其硯
を予不何しと室晋子や
いと此号はくかたりと
筆をりて本述あるをやく
恒玄龍の額を需てあるの

軒葉よりけり
延家乃とくしめ桃青門より
より室の万歳をよめ
いさよよきりりなり

具角

五元集

四十の賀しはる家よて

清秘好し墨を抄せし梅状

遊大音と

んめくくを食の家も歌うとく

加列小松観音寺奉納

梅のふ且那を待つ庭あり

芭蕉翁のゆめうけものし

うりて総讃をとけり

せめてものふと柿よんめのふ

曉

をよみ圖をさうみてやむめのふ
不曲亭

あせを鑑目あても梅の匂ぬ
こつとりとほのびておひぬの梅
あつしやく枝のこけ目や梅のふ

宰府奉納

守梅乃夢のついでに野老賣

和心水推敲之句

そらくはよき月みより梅の門

梅津良 如祖父大坂

表の軍功より

沛感狀 沛た刀をた斬

せつふ正月十七日のおとや

悦升上枚増にがき等の家臣

十七人としおのぬおつては

とも正月十七日 後嗣の強

何れも其家督執權とて

けまのがき等あり

幡おを文臺服やむめのふ

元り高珠喉あつし
の
を
祝
つ
り
あ
ら
ま
し
し

夜光る梅のつらさや貝の玉

仙石を改守との可なり
力ありあひぬ玉を
清梅やとらさ

外様と手向の梅をぬこり

元禄十三年二月十九日

聖廟八百餘所
皇太子御社
興行一社

梅松やあつむる数も八百所

氷肌玉骨と

昔心一花のよもあも梅の皮

久松肅山亭子

梅宮く花岩の星乃白あね

百八のうそて迷や闇の人あ

芭蕉庵をさして

号や十のころも月一んあ

くつらあよ茶教人芭のあや

腕押のちせああは梅乃あ

第本れあかいと是あやこの梅

雪の力をと並りはつと

正五隅

うらみすゝといへばきん杉狭

茶白のふゆのつる梅子

雪や氷の如き色をみよひの

茶抄のまゝのむすむる梅子

うらみすの曲なる枝を削る

雪ふよおのこし ちかかへる

うらみすやを詠ふうら礼経

市隅

竹のうらして雪まはるうら竹尻

うらみすや 梅子やうらう 梅子の世の如

長嘯の詠は後年の如き

うらみすやうらうてよてまに

佛をうらむる梅子を

いふあれや雪をよみたりあ

はらふよあくりんをむよのん

のうらつる其めをよみよ

土のうらくりんを無下み葉つが

正月に己布施の弁や天へ

詣りて奉納

玉椿昼とみくうら布粒籠

梅津硯水會子

窓物やれと梅おころひぬ大塚中

正月廿三日冠里公に侍を

葉刻之の上をを握る蕨うふ

接本を画て

才おせるのち継とやんつひ

十一日

お汁粉を還城樂のこもとけ

系清く不帯みせせや二蕨

漸覺春相泥とりの切句

潮うけ膏藥ありの鼻をあれ

畠のうら江中よりあしわつあつと

二んーつりのうけおふ

あつとふ高うらまをとおこふ

百人の雪搔志とし芥ちる

五葉志うらまの朱雁の柳と
ゆるり所々のうらまを

きひひとこハ西の虎みおるひり

とけつとる態よ白つる芥か

七種やめせみ輝一の松と

あくや下流ようらま 鳥島

砂植のあ葉もあつとりのわらふ

河別八尾
姫とて

溪邊双白鶴

浦の邊 芥梳は流り
うす氷やうらうら笑る芥のふ
一糸のけしき海より 帆
石の下清なる流や むす規
白魚や海苔の下鳥の買合せ
けふもや何れもさへ海鳥の味
白魚や 漁翁の齒よりあひ流
白くさの罾の何れはひたり
陽をや小塚乃砂中明るに

あゝ〜 子安子

こゝろのいも女房もせん水祝

衆前入懐の夢をひらき

引つてこそ松をくいのり氣をか
寶引小切年の角をまろくも
帯せぬと津はまはし 踏まの宴
難解人神の糸を引りてせん
向をまゆ中み大黒辰を以
はめりせもを指ひよつ送
年神子持の口をく小櫃り

昼成

三月正當三十日

山吹も柳の糸掛はくま
梟子あそび目鏡や臈月
禮うや太神宮へつら
指を流すや天氣定めて楳下

格技繪馬合子

こも〜斯虫あそび〜つら
楳下

禁固ヲ破リて暇ヲ玉ルコ

破や見惜い銀鞍父乃知ん

流き

やあ入やきれいあとの是は星

故赤穂城主浅野水府監長矩之舊

臣大石内藏之助等四十六人同志異体

報亡君之讎今茲二月四日

官裁下令一時伏刃齧屍

万世の伝へつら黄台録ひるく

肺肝をうつらぬく

うらみさあけ芥子酢ハあそび

富森春帆大言子葉非傍竹平

これ〜うなハ焦尾琴もあそび

あそびけるこ

黒印半面美人の字を彫て琴形
の中ニ備へたるをほしめ冠里の
万句の序巻ニ押弘めゆるまで

春の月見子お書は

悼後立老 初音女

昔うれ初音三井さま此を

題水

ちく万河を以水や夜の髓

昼贄

拾ほの風巾子うらむや玉箒

家みけの席を水くぬる寺

ま納

金柑や色青よ所いも稻柿山

藪入や下いあつるうら等

やみや牛合を引大原を

元禄丙子のうらむ月まつま
は穿らうり出山するあまひゆり
畠中の梅のわつえは古合斗
ある蛙のかき色をたけて野乃
草茎をさうへしとおとらゆる

草茎を包む塔のあを雪うら

切牛豆とほりり 柳

御忌

人の世や乃らうある日流るる林

本多徳品公まで

まはれおやまはれの鞭のゆめはう

阿比川流舟

阿ふの柳りんりり百中を

柳一ふの敷もうすまのあ

摺干や柳の曲をつつふ 狙

市川才牛追善

一子九翁名取つき伝ふ

塗部のははあうや雉の色

菜苑

黒地麻てくをあぬり土糸

まゐるやひきよめは枯はら

多能あしきり

園の春のなつちあはれと梅の袖

新三十二間を

名妙やそのの翁もあはれ

青柳子梅梅つふあはれと梅

柳上誘の園子

清くさ梅の梅の翁もあはれ

形城の賢あはれは柳の翁

春雨

纏り立してつふあはれと梅

はあはれとつふあはれと梅

二日中平の上京後

西の死出旅を旅の翁もあはれ

清くさ梅の梅の翁もあはれ

佛若大晦日入滅あり
いふふ仏ともえんちやいす
へさうくふ家世のいあふ
往生もあのみあふ
佛もいふくうの花ありあふ
山里の名もあつしや佐指法
神尊の盆とんさうり神充賣
と丁あう里色大赤の里ひさう
野嵐のこれさうあふつく
竹のまや柳をるな落のさう
梅のさけ一すもあふさう

二月十七日京驛

了生の勝都のちまたて巻ん
おぼらさか松の里ささ月おふ
数焼のいさを都の居を
一指よ玉子をさう人
さうさうさう玉あすもあふ
京都の何とよ 雨
拿や薪のぬめり屋もあ

無車馬喧

夕日新町やあふことあ

見獅子伶有威

了もたるや柳子の歌の君とし
蝶ともや猿をよみよし系を
葉層よみよをよしよしこてあ

新菜

聖堂よこほせく蝶の袂の
百やせ六めりう葉乃こてあ

柳燕圖

しらめをささうこらに柳の
茶のあよをふふしと星蕨
燕画せしやかろく菓を申几中

階子くともあはよあつた
海面の紅をけりきさるはめ
傘子あかさうるぬまし燕
腰やひをりあられと夕日
うつら子教く雉の張るふ
くうと雉をさうむる大の壺

角田川よて

あけよ其子を召らる雉乃を
海草すく水の急ますめ都る
小田のす嶽も柱やのこる

高のこころあはる江北星の敷
ちんちん蝦もそめる涙う糸
帆柱のせみよりおろすき雀外
苗体やなほはるる畝傳ひ
とほおろし俵子海す小橋外
景政り片目をひろく田螺うか
みれば海もくくゆる子
孫とも乃蚕やあま日向外
春もや素のまよ酔ふの尾流

泊津岩城より逗留し
錢字のりあ子を恨むる
よしすくはるし

杉をみや島り江世とも叶席

南村千彌伝書く

乃春や猿も越つ乃志貝

富士乃踏りそのまは侍り

三帆舟ハ塩尻のたるうは

かたあまのりしる梅乃小枝子
贈の字あまをらんあまをらん
句をすすあけるつあて

梅の名をうしるや贈のやあま

いせのきしき 夕げとあはれ
馬もあつるをよめ門や傀儡師
傀儡師あはれのあつるをよめ

四睡圖

うけりあまぬも 寝るや虎の耳
三筋小酒井村就音まじり
あまぬも 寝るや虎の耳

或るもあつる比鳥を
寝るあまぬも 寝るや虎の耳
住持あつるをよめ 寝るや虎の耳
さあつるをよめ 寝るや虎の耳

能睡 暖か所嗅出たぬあつる
能忘 ちりあまぬも 寝るや虎の雨
能捕 勢りと氣の味を回ては
能狂 陽あつるをよめ 寝るや虎の
能耽 寝のあるあつるをよめ 寝るや虎の

自注

蝶を嗜て子猫を能る 心あ

足跡をつまらざる猫や雪の中
猫の子れんつたつたつた

市間喧

片げ本巻の舟あはるはる雨陸

をを酔酔帰のたふたの内ひ

かひあふらん
春の夜の女とふあふんすあふ

宰府系譜の舟中

葉のふ乃小城を小舟あふる

醜子桃李のるく 純白

鶯の柳子よほくく逆毛小

玉子曲水

あ春を鳥帽子あふせん若く

曙やまに桃李の鶯の声

初はる小柳やあああ城の脇踊

得くあて雛の室や延長袴

たてのまや盗まぬ雛ハ松浦舟

おほなる木巻もあひ雛を炎

雛やもも基盤よおろりうまけ

三日月の甲の香うらけ

ひふやその佐野のワりの香の袖
取のひふ清水坂を一目の香
折菓子井筒の香を雛のうけ
雛の子は宮服くみゆしける

永休島は幅をさす

汐干やそらうまそと菜れ次序貝
釈ま〜む比目をとろん汐干が
絶國の朝物つそと汐干う

第酌

もとのうや雛子菊そく小蓋
曲あ子所の氣違ハ茶碗ち
菓子か魚よけし人形せ桃のふ
曲水や寛海うはる宿な〜そ

錦さうして福ひおさうりる雛の息
うり云を雛も懐め虎の母
雛くれ世人を初燃の桜姿か
緑豆の皮も白〜桃の眉

須弥はよふおむちより合
貝をさへをささるる
蛤のくもはさむら 五柳

乃落云あつてく 市浴養の比
たあんけのむちさつし
仰あつておむちの市書と
はあつてさつし

脚息よ 向のふむと山後

露沾公市庭

寐ゆらよ又らん月のお梅
縁のうらこあつて思ふ花の庭
地神やむのおとら松さつし
花をん母まつらるる盲児
いささく小町々姉のなつし

黒谷まで

万ののれちつと花 追梅

仁和寺

いふ戸のまらふあめ 梅は

上野まで

涼師で扈從つとあ梅と

妙鏡城より花送るよ

文の流し梅片一もに侍り

花中尋友

饅頭を人をしらふと山梅

一巻を袖上りと招れて

初梅天物のつらふとあせし

友猿の友まらふとあ花衣

三月廿日 舎裏亭に

山あまふ 序儀 一巻

序近初や花のこあらふとあ

門柳 花をほらふとあ

うらみす 啼

序用より下児うすあ花のつ

矮屋暮 矢の膝をりとの

たのりより心まら酒を吞て

傀儡の鼓うつなる 義経ん

表中郎
面上右西湖

石河氏宜兩公の山居なり
羨景を仰つちて四方の四の
情をたておしめさるる

二節のつら角豆り山居々々

護國寺よりあそぶ時

こころをむくまへて

白をやはらけり顔の嬌嫩

立ちをあらはせし

比身ありくまじや人に花衣

京よりくまらん

花よ遊て雅遊よまらん都の

寝よとすは棒つきいゆるむ山

山根猿を放しと梢のま

もあそぶ人の礎よりあつて

礼を教物くくし友にあつて

侍座

礼ありと表書院と日月代

もよみと都の幕の盛れ

葉盛るてあるらあし夫婦は

たは盛れくく踏まらんあ

せれあせ五年己あ乃女と

目黒松隣堂にて

浮世成を替りて嘆き山はぬ

越東殿山三寸

小坊言や松よりくれて山楢
八寸は乃山はさくくや一沈こ
人を人を恋の毒やとあふを

茅野山あま

の星や楢はくくは絶山うつ

おろし殺生偷盗あり

何とと花子五戒の楢は

行ある事と市座の花を語り
けりて

花をほん使者のおたよ月をほ

ぬ子万をを依りて

そのもよあうてあうやあ益

酒のけうあよさく花を

ち外よ漬味みせと塩楢

惜花不掃地

赤坂屋をいふお藤ゆるり

西序

さくもろの片を五の八はすれや

上野 清水堂にて

待りけりて志も盛のちり
ちり花や改けをへりる足の心

日論の傍と遊音のうへ

もる酒傍も 候ん塩を

一食千金とや

津西の何五あるせん出くろ網

辛未の春上野よあそぶ日

主薨御のよきをわきて世上
一雨も愁眉ひらめく

其跡生との二日そや 山はくろ

花と待てこのすめく喧嘩買

上野 御

わたり徒士に立る出乃花を

尋花

梅木屋の亭に苗をこもいす

池と居味も遊りて

車あそ花んをらんや 東山

茶室をすせて似合ん人を誰

酒を毒美を毒の毒らんや

此雨よふはぬ人や 家乃豆

王維山水
寸馬豆人

永代寺池色

池を吞大耳入あひ花の紅

南盛さうりめて上京よ

花と濃伊勢を仕まへて裏袖

大悲心院の花をて作りて

灌頂の園よりわてて梅小

茶もさひよけ晩鐘を山梅

おとくも花の間乃せうねふ

望月夜や鐘よのこ初さく

あふの山を

梅を

梅葉の花のうらや梅月

小冬居は花雪の神りてし山

月雪よふ山吹雪のあふ影は

亦是より木を一えおつし山

後咲を襦ろ小日をかそひり

且々あさしぬさしむるはり山

おれや能わくる花の梅

心をすし居れはくさし山岩つ

よはよらんぬ石の五法や後花あ

白飯を酌みとよつふ茶あ

河州川遊記

親の養ハ山成乃深や志々也

錦もも後の風を晴くく

三月十二日合衆亭の花
あつ下迄は多りて

植足小三切の供やふら

印く入相

はくと花乃名あや笄扇

秋航をせと路々

多それや後極く扇元

龍樹菩薩の禪陀加王の對
貪欲を志めしめつるまゝ
有瘡人近猛煙殆雖悦後増
苦の又のそらを
雁瘡のいゆるめゆ

十訓出記

一目之羅不能はる得鳥之羅
唯是一目以之のそらを

意馬心後の解

立馬の目を後信義心

梅のそ白くあはれ
かりせき入しあ
はるるのそを

雑司の墓

山里ハ人をあつたのたんた

口の三浦公侍従あたりて

室永二年三月廿七日

京使よりあつたを祝ひ

後辰や廿七人あ殿より

芭蕉の自画十三懐周之讚

巾の幅乃十字志とし柳陰

芭蕉

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

官城

歴々や下るあおし一時

河東

川あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

石間長屋子

時を人の懐くんと下水
子親一二の橋乃其取
既成の三味線志り

竹廊

時をあつつき傘を買せり

赤折山

夜丁しきけ襦あつた鼓
子ねこの用さ日月の時
寮坊主のまのハ麻

庐山雨夜

宰府七子納

卯を子守る居くと越子

林中不賣薪

世子あや山時を所たう

けう江さよ村あて

くあ山村場の日陰や
時を五加わくを海

曲終人不見

曉の反吐いさあり
時をわれや崩あひく

あまのまに花もあます時を
母のおくは侍りてこのあま
あまのゆめのこころを
あまのまに花もあます時を

あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を

あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を

白文

人百の四月あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を

浅草の樹下

あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を
あまのまに花もあます時を

時を人をは馳走ふ寝ぬおれ
目の上子目をくくや 子規

夢昼

砂の目み福をを流し新云

姉の噂の野史忠功孝を

きりりのきりて禄をぬり

起てきりけけ何を市云お記

佛とくふの世にふくくしき

交銘や母よきりせせしん

風光別我昔吟身

大酒よ起てもあゝきと裕か

趣はゆよきぬさくきやな

一とあよ裕の成や黒はう

卯月八日母よおくれ

力よとりて衣ふくまきう月

慈母墓

初め子うわしあゝる

上りる

灌佛や控ふおしるあ

つる紫白合よ

年々〜ワ〜のまのあつらひ
殿つらり並てお〜桐のふ
メのまあふ

うりれあや異見ふ咽む牡丹
のり〜北あはれその牡丹指
河品親心寺

楠の遣ぬる〜あ〜
籠前ぬを

あ〜ぬ火の院ま〜る牡丹

雨意 艶士のあつて

ハヤをさうつ〜みあふ〜ん
池田の梅棠子背柏のた状を
あつめて集あつて
さしてりし用み火と〜は〜

下流卯月の中の一曰

隠岐殿の〜あ〜せ後山

あ〜豊百里全阿南登号
上京のめ三十三日の吹流

室深用元奉替使
侍侍美の人のあまて

と〜〜氣て伴せと誰う衣う

屏風に後房に位するの
送ひ子に位よりあしめ香

長安を源ら家は紅毛来
貢のふく奇なりとて
桐のむ新波の鷲將 不言
愛娘子

新啼て玉子吸飲ハあしめ
序令初め上系も饒
涼を都のそとや 連や金

揚州霍

護国寺よあそよ
水漬よ目こあそよ 牡も
うそんりいそくあふ二河位也
葉の株も有りしりきつり
屋おけあよ提すあ社ふ
七子納
のそれ所終やうけて在る

田家

あそめよ足何りそ娘さ
け獨よ笠のつくやあ田家

木賀入湯のてら
まきもやお苗のりたるるのり

袖裏や茹かりけお白くま
舟乗り北均を吹や夕あお
卯あお蛸あうあおたうくす
ふのあやいつ運の津所のかあ治

寄幻呼長老

老僧の笥をかああうり
筆と竹ありかろよ大何し
竹の尻をおるあや五月間

腰下魚寸鉄

筆やあ山あもの 鎗の鞘

素堂居

叶あうりハ皆喰ものそあの叶

楓子居

其叶や家ハくれて御用草
夜あや橋基えして何通り
目通の罟の根や葉はうみ
吐ぬ鴉のああうよああ海山
松あつれて一里ハあり岡の松
争たぬあこれ耳やうりあを

画興

戸塚越後守

禊祓の効ハ己日の危者ハ
帆をかり舟ハ禊り強くれ
夕塔やおのる子あし中少々
あしすり通る時

世甲を去りて此小孫を
飯館の饗あつて支都外

和意詩

伊せあつても松魚あつて酒定
こよりさきの名ハ昔まをふり外

呈高江公饒

笠帯木や人言つる五月雨
けしけれせきも外を通る人
顔むらみ田子のもよそやさ月雨
けしけれやも土の煙乃を浮る
かりもあや傘あはる小人形
さしこれる酒勾てさる和茄子

巖窟院殿乃大法るを

東敷のよね三草ル

夕日おのるも休むり法の色

市譯吟

言舟とわらる 鯉やけのを組
ああやめのの何れもつらなる鳥外

公門年入時

あやめくぬり 陸子乃こころは
磯泊を沼よなりしら 菖くを

りよむけあ あやめも阿やめ
うりくぬま 宿玉を あか
やもくおほふぬ 危あれし
新のくく おあめりや 守せ大浦
家のくく おあめりや 守せ大浦

菖くを 蛙のつらよ 阿やめり

けあやめをくく 白蛇
二毛の虫をわすれて ねとらの
ちりとのこころととのくまを
との人形の風俗とけし
おきああとりやん 形いし

新ひく 坊主あまや 花菖

五月三日 家あし

屋根葺と並てかけら 菖が
ありし ぬら女の塔の尻みえ
かきくし
山毎の糍やせめて湯あく
サコ
舟のすやいしとさあのおひ糍

本庄しし夕しを志めて昔草

五月十三日

雨をやはも酔日乃くあつめ
藤のまもや金魚よりるるる

酒満

葛のそ乃酒興童子も二面

青嵐とりの歌を

海松おまふ杉の朧やお深山
蝙蝠の屎もふふふれあやめ
交代の葉守の津や初拍
疱瘡おあふふを不憐お

緑槐 高處

ちのせまや笛よはるをと十文字
うらうら酒の看も遠せりり
漁舎やむの角下好牛
くわめてや舟よ生をるるあや
文七のあやうか存のうらうあ

河原町あて

毒り家おしりなよあま告やん
字作もそ

川くまや水よ二重のあつら

ふんせいの終よ
夏虫の暮あこくねるる會

谷中

風おのを森のつらやうと

傍らるる

後しらま貝少く借よらん

下やこや鳴根性のあくれ声

露江公溜池の高樹よ

たしあてし涼を揺んとさ

夏ふよ我ハ御着とるる女ハ

宇都宮入道

蓮生ハあひよやぬを虫拂ひ

樟脳よ代をゆるりその鏡うま

よあり世し時の花うまゆかし

撥くや木村まうけてまゆかし

浴衣着て肌貫まは袖まは

粗公 溜池まへ

肌おいて猿まらりするあつさ

水鷲まういらぬ此のつら

千爪やうつおけてちよ管小舟

此の及水もろてよ流れたり

亀毛の鱗

此の皮は笠ハ重どりたれまう

破扇の圖

羅光り扇架く持し扇は
鳥飛餅の何れ子の何つ子
紅よりちののさし白た
せと啼や木のちりしる園り
隣りくは木にくむやせとの色
竹のせとけららよ志何の時
あうそやせとも雀も世を程

空傳言入真

白雨の内候多あく物話り

市井白雨とらあ歌

春よ春もあつらふな腥
白あやもうをむねを菊の子
ゆめり池あ夢あつてはるま
夕立よひぐりかきるやうあ

中嶋三遠の津赤あそ
雨をすりあのみりり

夕立や田をんめうの津あむ

翌日雨あふ

舟中吟

はらに乃箱波のあて里急

うらひすうの

西行と御花村の長生
幸れをたのむをつも
見よくの病は長生の心
土甲のりつとあまの心
常ある花よりあまの心

鳥心かおもむく人よ

春柳やつくも花ある故の心よ
あまの心や白き心宿垣根より
野焼ハタを去る世あま
麻村や家をへらるあま

或人の後者余宮へける人
をさすひけすとして

夏のおを吉次く冠者みね
あのおを 藤丸の飛氣の記より

生死去来

鳥り好らいつくより言の音

捕虎 東坡

七、色のはまらるあや足疾鬼
好揮よゆめのうす移りくるこ
故をやく心慮知る国のみ心
りやり火や好らつるあま老福

更困

石灯 翁好屋よ消り 移舟よ

しきけさよまぶせんごうも
うちんあさねのうさめてほ

切れしりまのハ誠り 蚤の宿

旅店

ふまの雪蠅ハ酒彦子 孫りり

あうん大あうんつを二あり
刻てを盡し一かいかさひのま
内いれよ塗してわの口よあは
をくせしりまのそむ

清水の秋夜半 白り面ようありり

形 目鼻あささうのまご

浅草河 歳こ吟涼

舟人 数舟をれえしり 三小

川原の 影子泥をる 旅りあ

涼まつむ安夜や上端よ舟いあ

すーさや帆子 船段のちり髪

舟暑し 配るれのもく 園の影

午んくまを 欄干や 橋はん

涼ーさや先 曲旅野の 流星

舞退之 捨酒 吟あは

酒ちり 舟をうーや 心涼

此碑て八江を哀まを當か

牛御前

是や皆雨を吹く人あすみ

橋上休老よりあ歌子

牛泥む老の齒うまや橋は

船を玉子てきくあすみ

海を見て凍む角あす鬼尾

餞久松蕭山

筆をさすは歩道やうま下凍

くのみまて

あすみあすみあすみ

画讀

大虚亭の布衣の指のゆく所

日松よあすみのあすみ

十八の月神つまよはみ

河原あす

あすを牛はくすあす

あすのあすあすあす

あすのあすあすあす

遊子残月

暑字 けいさくして

むら雨のち舞は通る暑さか

呈餞 露江石

供この鞘の暑さや岡の松

人また暑は影あはし 端啼き

自棄

きらみろく 物起昼寐のけい

五月十日 雷雨永代島の

茶店平 やさし

ゆきより 神心晴て 難の蓋

住吉のて西宮の夫敷御坊

せし けいよ けいよ けいよ

讓のあま 二百万の輝あけ

七十余の老醫をすのりて

善のちをさしけるその老醫の

いまそよりけしは時さし

けいよんあまのけいよんあま

かりいよのけいよんあま

なりまのけいよんあま

六尺も力あまのけいよんあま

村田忠菴

年この年秋江のる社も
すめあある霊仏冥神一
おんりる神一して興廢の脚
感歎あゝなる中一のさ
時の用情ふれらのの脚て
れをうゝれて官督罰するのさ
くいり暑をちやるに霍
乱虫氣のちをうりちをく増
ふくはあてけくお行裡の
遠道ちをけ番のうりて

海にそとと振舞水の下向を

秋天あちりやに

夕影あちあちけを賣名号

左少物見

